

保育専攻学生における実習中のソーシャルサポートが 保育者意識に及ぼす影響

野崎 秀正 ・ 森野 美央*

Effects of Social Support during Teaching Practice on the Student's Consciousness of the Role of Preschool Teachers

Hidemasa NOSAKI and Miwo MORINO

Summary

The purpose of this study was to examine the effects of perceived social supports during teaching practice on shaping consciousness of the role of preschool teachers. Then we focus on the buffering effects of social supports on the relation between stressor and consciousness of the role of preschool teachers. As a sample, 322 junior college students in an early childhood education course were asked about their stressor and social supports during their teaching practice, their orientation toward preschool teacher, and their preschool-teacher-efficacy. Data were analyzed through several regression analysis with interaction terms. The main results were that students with lower level of perceived supports from several support source decrease their orientation toward preschool teacher and their preschool-teacher-efficacy if they had higher level of perceived stressor during teaching practice. This results suggest that buffering effect of social supports. However, an opposite result to them was also shown. Students with higher level of perceived social supports from their friends decreased their preschool-teacher-efficacy if they had higher level of perceived stressor from their tutor in teaching practice. This result means supports from friends during teaching practice may have an negative effect on shaping preschool-teacher-efficacy. Anyway, The research showed the perceived social supports during teaching practice have a profound effect on shaping student's orientation toward preschool teacher, and their preschool-teacher-efficacy.

問 題

保育者養成機関には保育者としての資質や技量を所属学生に身につけさせるための様々なカリキュラムが存在するが、その中でも保育実習は重要なものの一つである。保育者養成機関において開講されている多くの授業科目とは異なり、実際の保育業務を直接経験する保育実習は、近い将来、

* 尚綱大学短期大学部幼児教育学科

自分が保育職に就くことを最も自覚させる科目であるといえ、保育職とはどのような職業かという保育者観や保育者になる者としての自己意識などの保育者意識を形成、変容させる機会になりえる。

保育実習が実習生の種々の保育者意識に及ぼす影響については、これまで、いくつかの研究で検討されている。その中でも、保育実習が保育者効力感に及ぼす影響については、近年よく取り上げられている。保育者効力感とは「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為を取ることができる信念」と定義される概念であり、Bandura(1977)の自己効力感理論に基づき、学校教育場面における教師の教師効力感として検討が進められてきたものを、保育場面における保育者あるいは実習生に適用したものである(三木・桜井, 1998)。保育者効力感の高い保育者は「子どもの理解・対応の難しさ」や「学級経営の難しさ」といったストレス評価が低いという研究結果(西坂, 2002)からも明らかのように、保育者効力感は、保育者としての資質や技量の高さにも関連する重要な動機づけ要因であるといえる。三木・桜井(1998)は、保育者養成機関に所属する学生を対象に、保育実習の前後で保育者効力感を比較し、実習経験が保育者効力感に及ぼす影響を検討した。その結果、実習前と実習後では実習後の保育者効力感の方が傾向水準ではあるものの高い値を示すことが明らかになり、実習経験が保育者効力感を向上させることを明らかにした。また、水野(2001)は、三木・桜井(1998)の研究よりも保育実習前後の調査時期の間隔を短く設定し、さらに1年時の保育者効力感も加えた検討を行った。その結果、特に園児への個別理解に関する保育者効力感について、2年時の保育実習を終えた時点の方が、1年時や2年時の保育実習前の時点よりも有意に高いことを明らかにした。これらの研究は、保育実習の役割が、実習生に実際の保育業務を直接学ばせるというだけに止まらず、実習生の保育者効力感や保育職へ就く動機づけを高めるといった点においても重要な役割を果たすことを示したといえる。

しかし、保育実習が実習生にもたらすものは必ずしもポジティブな影響ばかりではない。実習中、実習生は新規な環境において新しい人間関係を構築しなければならず、また学生としての役割に加え、働く職業人としての責任と自覚も要求され、さらに毎日の実習記録簿の作成や研究保育の準備と実施といった多くの課題が要求される。こうした事態は多くの実習生にとって大きなストレス事態となりうるだろう。実習生の実習ストレスに関する研究は、これまでもいくつか行われている。そのうち、坂田・音山・古屋(1999)は、教育実習期間中に被る種々のストレス事態について、これらを測定する教育実習ストレス尺度を作成している。この尺度は、実習中に刺激事態を経験したかどうかの有無とそれをどれほど不快に感じたかの程度を尋ねるものであり、主成分分析の結果から、「基本的作業」、「実習業務」、「対教員」、「対児童・生徒」、「対実習生」という5つの実習ストレスの存在を明らかにした。また、古屋・音山・坂田(2005)の研究では、坂田・音山・古屋(1999)が作成した教育実習ストレス尺度を用いて、教育実習前後での実習ストレスの変動を検討し、実習業務と対生徒ストレスは1週目に、対教師ストレスは2週目にピークがあり、基本的作業と対実習生ストレスは2週目と終了直後で高くなることを明らかにした。これらの研究は、小学校、中学校及び高校の教育実習を対象にした実習ストレスの研究であるが、保育者養成に関連する保育実習ストレスの研究としては、音山(2002)、野崎・森野(2006)の研究がみられる。音山(2002)は、保育所以外の児童福祉施設における実習ストレスの研究を行っており、それまでの教育実習場面における研究と同様に、実習中に受けるストレスがストレス反応を引き起こすことを明らかにしている。また、野崎・森野(2006)は、保育所における保育実習ストレスに関する研究

を行っており、実習業務に関するストレッサー、園児との関わりに関するストレッサー、実習先の先生との関わりに関するストレッサーの順にストレッサー得点が高いことを明らかにしている。

これまでの実習ストレス研究においては、実習中に受ける種々のストレッサーとストレス反応(抑うつ傾向、怒り、不安など)の関連について焦点が当てられていた。しかし、保育実習ストレッサーはストレス反応を引き起こすだけではなく、実習生の保育者意識の変容をももたらすことが考えられる。例えば、三木・桜井(1998)は、保育実習の経験が保育者効力感の向上へと繋がるためには、実習園が自分の期待に沿うところと思えたり、楽しく実習ができたと思える「実習園への合致感」が重要であることを明らかにしている。このことは、単に実習を経験するだけで保育者効力感が向上するわけではなく、実習中にどのような経験をしたかで結果が異なることを示唆している。そのため、保育実習園において過度のストレッサーを受けた場合などは、保育実習の経験がむしろ保育者効力感の低下を促すことも予想される。野崎・森野(2006)は、こうした問題提起に基づき、実習中に受ける種々の保育実習ストレッサーと保育者効力感及び保育者志向性(保育職にどれほど就きたいと思うかについての意欲)の関連を検討した。その結果、対実習生ストレッサーを除く全ての保育実習ストレッサーと保育者効力感及び保育者志向性の間に有意な負の相関がみられることが明らかになり、保育実習中に受けるストレッサーが実習生の保育者意識をネガティブな方向に変容させることが示唆された。

それでは、保育実習ストレッサーが招くこうした事態を防ぐためにはどうすればよいのだろうか。1つの方法としては、保育実習ストレッサーそのものを取り除くことが考えられるが、保育者志向性や保育者効力感の低下と関連するストレッサーは、実習記録簿の記入や保育研究などの基本的作業、園児との関わりといったものであり(野崎・森野, 2006)、こうしたストレッサーを除去することは、保育実習のそもそもの性質上困難であろう。そのため、保育実習ストレッサーと保育者意識のネガティブな関係を緩衝させるコーピング要因は何かといった点に焦点を当て、研究を進める必要がある。そうしたコーピング要因の一つとして、これまでのストレス研究では、主に他者から受けるソーシャル・サポートの効果に関する研究が盛んに行われてきた(嶋, 1996 ; 浦, 1998)。その中でも、特に中心となって検討されてきたのが、ソーシャルサポートがストレス反応を引き起こすストレッサーのネガティブな影響を緩衝するという緩衝効果の検討である。多くのストレス研究と同様に、実習ストレス研究においても、実習ストレスに対するソーシャルサポートの緩衝効果を検討した研究がいくつか行われている。例えば、音山(1995)は、教育実習場面における実習ストレッサーがストレス反応を引き起こす過程において、情動的サポート、生活サポート、業務サポートといった種々のサポートが、そのネガティブな効果を低減させることを明らかにしている。また、保育所以外の施設実習場面においても同様の緩衝効果があることが報告されている(音山, 2002)。

これまで述べてきたソーシャル・サポートの緩衝効果に関する研究は、実習ストレッサーがストレス反応を引き起こす作用における緩衝効果を扱ったものであるが、先述のように保育実習中のストレッサーが保育者効力感の低下など保育者意識のネガティブな変容をもたらすのであれば、この作用についてもソーシャルサポートの緩衝効果がみられることが予想される。しかし、保育所実習における保育者意識の変容について、こうしたソーシャルサポートの緩衝効果を検討した研究はこれまでにみられない。そこで、本研究では、保育実習場面における保育実習ストレッサーが、どのくらい保育職に就きたいかという意欲に相当する保育者志向性とどれほど望ましい保育活動ができ

るかという信念にあたる保育者効力感の2つの保育者意識に及ぼすネガティブな影響に対して、保育実習中の周囲の他者からのソーシャルサポートが緩衝効果をもたらすかどうかについて検討することを目的とする。保育実習ストレスがもたらす様々な問題を軽減させる周囲の人的リソースの役割について検討することは、保育実習の効果を推進するための保育者養成校の役割を明確にする一助となることが期待される。なお、保育者意識と保育活動によるストレスの関係については、西坂(2002)が検討しているように保育者意識が保育ストレスの高低を規定するという本研究の想定とは逆の因果関係を持つことも考えられる。すなわち、本来なら保育者効力感と保育活動中において認知されたストレスとの関係は両方向の相互作用的な関係にあるといえる。この点について、本研究では現職の保育士を対象とするのではなく実習生を対象とすることから、実習を経験することで保育者意識が新たに形成される(三木・桜井, 1998)という考え方を前提にするため、実習ストレスが保育者意識を形成するという一方向の影響にのみに焦点を当てることとする。

方 法

1. 調査対象者

九州圏内のA短期大学における保育者養成学科に所属する2年生の学生188名とB大学短期大学部の保育者養成学科に所属する2年生の学生134名の計322名(全て女性)であった。

2. 調査時期

A短期大学については、保育所にて行われる「保育実習Ⅰa」と幼稚園にて行われる「幼稚園教育実習」を経験している2005年11月に調査を行った。B大学短期大学部については、福祉施設及び保育所にて行われる「保育実習Ⅰ」と付属幼稚園にて行われる「幼稚園教育実習」を経験している2006年7月に調査を行った。

3. 調査内容

(1)保育者志向性 将来、保育士または幼稚園教諭になりたいと思っているかどうかについて「1 なりたくない」、「2 どちらかといえばなりたくない」、「3 どちらともいえない」、「4 どちらかといえばなりたくない」、「5 なりたい」の5件法で回答を求めた。

(2)保育者効力感 三木・桜井(1998)が作成した保育者効力感尺度の10項目を使用した(例、「私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う」、「保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う」)。項目ごとに、将来、自分が保育士または幼稚園教諭になったとき各項目の内容をどのくらいできると思うかについて、「1 ほとんどそうは思わない」、「2 あまりそうは思わない」、「3 どちらともいえない」、「4 ややそう思う」、「5 非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

(3)保育実習ストレス尺度 坂田・音山・古屋(1999)が作成した教育実習ストレス尺度から、被調査者の負担を考え、「基本的作業」、「実習業務」、「対教員」からそれぞれ3項目、「対児童・生徒」から4項目、「対実習生」から1項目の計14項目を選び、各項目の内容を保育実習に適した内容に修正し、使用した。また、「対教員」、「対児童・生徒」の2つの項目群については、それぞれ「対実習先の先生」、「対園児」とした。最終的に、「基本的作業」(例、「指導案や実習記録を書いた」)、「実習業務」(例、「遅くまで拘束されたりして、自分のペースで作業を行えないことがあった」)、「

「対実習先の先生」(例、「実習先の先生に自分の失敗や欠点を指摘されることがあった」)、「対園児」(例、「園児が指示に従わなかったり、言うことを聞いてくれないことがあった」)、「対実習生」(「他の実習生とどのように接して良いかわからないことがあった」)の5つの項目群、14項目を使用した。各項目について、これまで行ってきた保育実習でそれらの刺激事態を経験したことがあるか否かを「0 なかった」、「1 あった」のいずれかに回答するよう求め、経験した項目については、それがどれぐらい嫌だったかについて「0 全然いやでなかった」、「1 少しいやであった」、「2 かなりいやであった」、「3 非常にいやであった」の4件法で回答を求めた。

(4)保育実習中のソーシャル・サポート尺度 久田・千田・箕口(1989)の学生用ソーシャルサポート尺度を参考にし、保育実習中に受けることが予想される11項目を作成した。項目毎に父親、母親、きょうだい、短大の先生、実習先の先生、友人・知人の6つのサポート源のそれぞれからどの程度援助を受けられると思うかについて、「1 絶対ちがう」、「2 たぶんちがう」、「3 たぶんそうだ」、「4 きっとそうだ」の4件法で回答を求めた。

結 果

1. 尺度の検討

保育者効力感尺度については、全10項目の α 係数を算出したところ $\alpha=.88$ と高い値が得られ、尺度の内的整合性について問題はみられなかった。そのため、全項目の平均値を保育者効力感得点として算出した。保育実習ストレス尺度については、2つ以上の項目からなる項目群については、ストレス事態としての評価値の平均値を算出し、これをストレス得点とした。「対実習生」については、同じ実習園に自分以外の実習生がいなかった者が多いことや経験率が11.6%と低いことから、これを除外し、この後は、「基本的作業」、「実習業務」、「対実習先の先生」、「対園児」の4つの保育実習ストレスについて検討を行うこととした。各項目群について、経験の有無と不快度の積を保育実習ストレス得点とした。保育実習中のソーシャルサポート尺度については、保育実習中に受ける他者からのサポート11項目について父親、母親、きょうだい、短大の先生、実習先の先生、友人・知人の各サポート源ごとに α 係数を算出した。その結果、父親 $\alpha=.91$ 、母親 $\alpha=.90$ 、きょうだい $\alpha=.87$ 、短大の先生 $\alpha=.92$ 、実習先の先生 $\alpha=.89$ 、友人・知人 $\alpha=.88$ とそれぞれ高い値を示し、各尺度の内的整合性には問題はみられなかった。そのため、6つのサポート源ごとに11項目の平均値を算出し、これを保育実習中のソーシャルサポート得点とした。各サポート源別の保育実習中のソーシャルサポート得点を表1に示す。

表1 保育実習中のソーシャルサポート尺度の項目内容と記述統計

項 目 内 容	父親		母親		きょうだい		短大の先生		実習先の先生		友人・知人	
	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D	平均値	S D
1 保育実習（教育実習）でうまくいかないことがあったら元気づけてくれる	3.09	0.96	3.67	0.64	2.94	0.99	3.32	0.79	3.19	0.72	3.75	0.50
2 あなたが保育実習（教育実習）中の出来事について話したら、興味を持って耳を傾けてくれる	3.21	0.89	3.67	0.55	2.94	0.99	3.46	0.72	3.43	0.70	3.66	0.52
3 あなたが保育者になる者としての自分自身の資質や能力について悩んでいたら、すぐに気づいて気づかせてくれる	2.68	0.95	3.72	0.82	2.52	0.97	2.87	0.89	3.01	0.79	3.35	0.73
4 保育（教育）実習でうまくいったことがあったと知ったら自分のことのように喜んでくれる	3.29	0.85	3.31	0.59	2.99	0.92	3.27	0.75	3.24	0.72	3.56	0.61
5 あなたがもし保育者になれたとしたら心からおめでとうと言ってくれる	3.78	0.54	3.70	0.41	3.70	0.63	3.70	0.57	3.60	0.62	3.87	0.37
6 保育（教育）実習中に1人では終わらせられない仕事があったときは快く手伝ってくれる	2.54	1.06	3.87	0.94	2.71	1.01	2.33	0.92	2.48	0.86	3.11	0.86
7 これから保育者になる者としてのあなたの能力を評価し、認めてくれる	3.30	0.80	3.28	0.67	3.09	0.87	3.22	0.68	3.14	0.66	3.44	0.59
8 保育実習（教育実習）中にわからないことがあったらいろいろとアドバイスしてくれる	2.62	1.00	3.52	0.88	2.50	0.98	3.38	0.74	3.56	0.62	3.33	0.75
9 保育者とはどのような仕事かについていろいろな情報を教えてくれる	2.45	0.98	3.28	0.95	2.24	0.95	3.56	0.61	3.62	0.60	3.05	0.85
10 あなたが保育者になるために必要な手続きについてわからないことがあったら、アドバイスをしてくれる	2.76	1.07	3.05	0.94	2.30	1.05	3.66	0.58	3.40	0.78	3.17	0.86
11 保育者になりたいというあなたの気持ちをよく理解してくれる	3.60	0.70	3.21	0.53	3.45	0.83	3.58	0.69	3.57	0.64	3.76	0.50
ソーシャルサポート得点	3.03	0.69	3.49	0.52	2.85	0.72	3.30	0.54	3.30	0.50	3.46	0.45

2. 保育者意識、保育実習ストレス、ソーシャルサポートの関連

保育者意識(保育者志向性、保育者効力感)、4つの保育実習ストレス、サポート源別の6つのソーシャルサポートの関連を検討するために、各要因間の相関係数(Pearsonの積率相関係数)を算出した。結果を表2に示す。

表2 保育者意識、保育実習ストレス、ソーシャルサポート間の相関係数（Pearsonの積率相関係数）

		保育者志向性	保育者効力感	保育実習ストレス			
				基本的作業	実習業務	対実習先の先生	対園児
保育実習 ストレス	基本的作業	-.209 **	-.204 **				
	実習業務	-.239 **	-.196 **	.335 **			
	対実習先の先生	-.207 **	-.124 *	.186 **	.406 **		
	対園児	-.191 **	-.308 **	.272 **	.309 **	.307 **	
ソーシャル サポート	父親	.155 **	.175 **	-.075	-.081	-.092	-.015
	母親	.211 **	.167 **	-.042	-.084	-.073	.014
	きょうだい	.172 **	.227 **	-.112 *	-.135	-.070	-.080
	短大の先生	.117 *	.265 **	-.002	-.062	-.098	-.053
	実習先の先生	.258 **	.373 **	-.088	-.235 **	-.357 **	-.164 **
	友人・知人	.039	.159 **	.013	-.112 *	.002	.028

注) * $p < .05$ 、** $p < .001$

まず、保育者志向性については、「基本的作業」($r = -.209$)、「実習業務」($r = -.239$)、「対実習先の先生」($r = -.207$)、「対園児」($r = -.191$)の4つ全ての保育実習ストレスとに間に有意な負の相関を示した。一方で、ソーシャルサポートとの関連については、友人・知人からのサポートを除く、「父親」($r = .155$)、「母親」($r = .211$)、「きょうだい」($r = .172$)、「短大の先生」($r = .117$)、「実習先の先生」($r = .258$)の5つのソーシャルサポートとの間に有意な正の相関を示した。次に、保育者効力感については、保育者志向性と同様「基本的作業」($r = -.204$)、「実習業務」($r = -.196$)、「対実習先の先生」($r = -.124$)、「対園児」($r = -.308$)の4つ全ての保育実習ストレスの間に有意な負の相関を示した。一方で、ソーシャルサポートとの関連については「父親」($r = .175$)、「母親」($r = .167$)、「きょうだい」($r = .227$)、「短大の先生」($r = .265$)、「実習先の先生」($r = .373$)、「友人・知人」($r = .159$)の6つ全てのソーシャルサポートとの間に有意な正の相関を示した。最後に、保育実習ストレスとソーシャルサポートの関連については、きょうだいからのソーシャルサポートと基本的作業ストレスの間($r = -.112$)、実習先の先生からのソーシャルサポートと実習業務ストレス、対実習先の先生ストレス、対園児ストレスの各保育実習ストレス(それぞれ、 $r = -.235$ 、 $r = -.357$ 、 $r = -.164$)との間、友人・知人からのソーシャルサポートと実習業務ストレス($r = -.112$)の間に有意な負の相関を示した。

3. 保育実習ストレスが保育者志向性、保育者効力感に及ぼす影響におけるソーシャルサポートの緩衝効果

先の分析で、保育実習中のソーシャルサポートと保育者志向性及び保育者効力感の間には、それぞれ正の相関関係があることが明らかになった。そこで、保育実習ストレスが保育者志向性及び保育者効力感に及ぼすネガティブな影響におけるソーシャルサポートの緩衝効果を検討するために、各サポート源及び各保育実習ストレスごとに、保育実習ストレス、ソーシャルサポート及び保育実習ストレスとソーシャルサポートの交互作用項を説明変数、保育者志向性または保育者効力感を基準変数とする重回帰分析(強制投入法)を行った。その結果、保育者志向性、保育者効力感ともに、いくつかの組み合わせにおいて、ソーシャルサポートの緩衝効果がみられた。

まず、保育者志向性については、母親からのサポートと実習業務ストレス、きょうだいからのサポートと実習業務ストレス、実習先の先生からのサポートと実習業務ストレス、実習先の先生からのサポートと対園児ストレスの交互作用項がそれぞれ5%水準で有意であった。それぞれの交互作用項の性質を詳細に検討するために、それぞれのソーシャルサポートが平均値、 $\pm 1SD$ の各水準における保育者志向性に対する保育実習ストレスの単回帰直線を求めた。それぞれの単回帰直線のグラフを図1から図4に示す。

下位検定の結果、いずれにおいてもソーシャルサポートが高い水準にある場合(+1SD)と中程度にある場合(平均値)の単回帰直線は有意ではなく、ソーシャルサポートが低い水準にある場合(-1SD)の単回帰直線においてのみ5%水準で有意であった。この結果は、いくつかのソーシャルサポートについては、ある種のストレスが保育者志向性に及ぼすネガティブな影響を緩衝することを示す結果であるといえる。特に、実習業務ストレスが保育者志向性に及ぼす影響については、母親、きょうだい、実習先の先生と3つのサポート源からのソーシャルサポートが緩衝効果を示していた。すなわち、それらのサポート源からのサポートが低い者については、実習記録の進め方がわからな

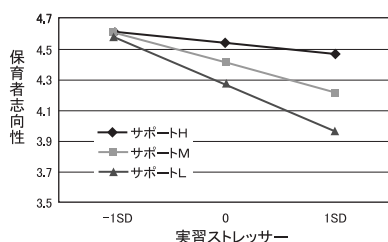


図1 実習業務ストレスナーから保育者志向性への影響における母親からのサポートの緩衝効果

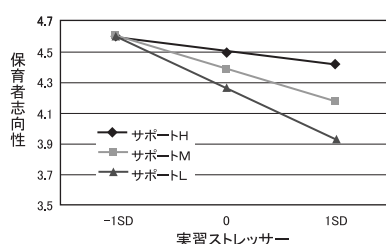


図2 実習業務ストレスナーから保育者志向性への影響におけるきょうだいからのサポートの緩衝効果

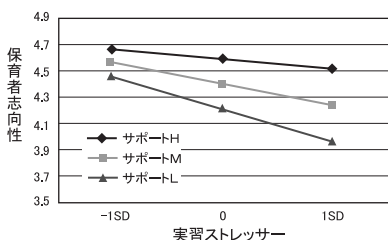


図3 実習業務ストレスナーから保育者志向性への影響における実習先の先生からのサポートの緩衝効果

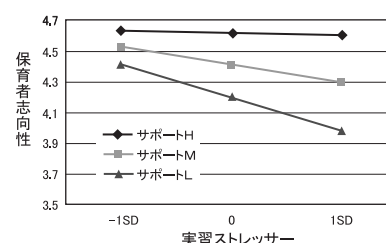


図4 対園児ストレスナーから保育者志向性への影響における実習先の先生からのサポートの緩衝効果

いなど実習業務ストレスナーが高い者ほど将来保育職に就くことへの動機づけが低い傾向にあったが、サポートが中程度の者、高い者については、実習業務ストレスナーの高低にかかわらず将来保育職に就くことへの動機づけは変わらない傾向にあった。

次に、保育者効力感については、きょうだいからのサポートと基本的作業ストレスナー、きょうだいからのサポートと実習業務ストレスナー、友人・知人からのサポートと対実習先の先生ストレスナーの交互作用項がそれぞれ5%水準で有意であった。それぞれの交互作用項の性質を詳細に検討するために、ソーシャルサポートが平均値、±1SDの各水準における保育者効力感に対する保育実習ストレスナーの単回帰直線を求めた。それぞれの単回帰直線のグラフを図5から図7に示す。下位検定の結果、きょうだいからのサポートと実習業務ストレスナーの交互作用については、ソーシャルサポートが高い水準にある場合(+1SD)と中程度にある場合(平均値)の単回帰直線は有意ではなく、ソーシャルサポートが低い水準にある場合(-1SD)の単回帰直線においてのみ5%水準で有意であった。この結果は、きょうだいからのソーシャルサポートが保育実習中の作業・業務に関するストレスナーから保育者効力感へのネガティブな効果を緩衝することを示す結果であるといえる。すなわち、きょうだいからのサポートが低い者については、保育実習中の基本的な作業や実習業務に関するストレスナーが高くなるほど自分がどのくらい保育活動がうまくできるかといった効力感が低くなる傾向にあったが、サポートが中程度の者、高い者については、そうした保育実習ストレスナーの高低にかかわらず保育職への効力感是不変傾向にあった。一方、友人・知人からのサポートと対実習先の先生ストレスナーの交互作用については全く逆の結果がみられ、ソーシャルサポートが高い水準にある場合(+1SD)と中程度にある場合(平均値)において、5%水準で有意な負の単回帰直線を示し、ソーシャルサポートが低い水準にある場合(-1SD)の単回帰直線は有意ではなかった。すなわち、実習中のソーシャルサポートの緩衝効果という予想に対して因果の方向性が全く逆の結果であり、友

人や知人からサポートを多くもらっている者ほど、実習先の先生から受けるストレスにより保育者効力感を低下させるということが明らかになった。

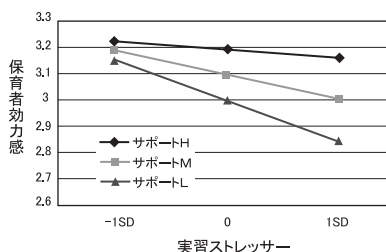


図5 基本的作業ストレスから保育者効力感への影響におけるきょうだいのサポートの緩衝効果

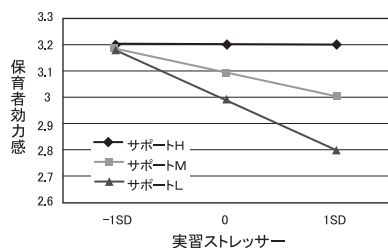


図6 実習業務ストレスから保育者効力感への影響におけるきょうだいのサポートの緩衝効果

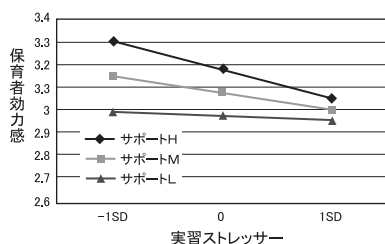


図7 対実習先の先生ストレスから保育者効力感への影響における友人・知人からのサポートの緩衝効果

考 察

本研究の目的は、ストレス過程におけるソーシャルサポートの緩衝効果を明らかにした先行研究に基づき、保育実習場面における実習ストレスから保育者志向性及び保育者効力感という2つの保育者意識への影響におけるソーシャルサポートの緩衝効果を明らかにすることであった。

まず、各要因間の相関関係についてであるが、保育者志向性及び保育者効力感とほぼ全ての保育実習ストレスとの間に有意な負の相関がみられたのはこれまでの先行研究の結果と同じであり、予想に従うものであった。つまり、保育実習の期間中に保育実習ストレスを多く受けた者ほど、保育者になろうとする動機づけが低く、保育活動に対する効力感が低いことが示された。一方で、保育実習中のソーシャルサポートと保育者志向性、保育者効力感の間に有意な正の相関がみられたことも予想に従う結果であった。つまり、保育実習に関するサポートを他者から多く受けた者ほど、保育者になろうとする動機づけが高く、保育に対する効力感が高いことが示された。この結果は、保育実習中のソーシャルサポートが保育実習ストレスから保育者意識へのネガティブな影響に対する緩衝効果を持つ可能性を示唆するものであった。また、保育実習ストレスとソーシャルサポートの関連については、いくつかの組み合わせで有意な負の相関がみられたものの、その多くに有意な相関はみられなかった。この結果については、保育実習中のソーシャルサポートが保育実習ストレスそのものに直接影響を及ぼすというよりは、保育実習ストレスが引き起こすなんらかの作用に影響を及ぼすためであることが考えられた。それでも、実習先の先生からのサポー

トのみ保育実習ストレスととの間に有意な負の相関がみられたことについては、実習先での大部分の業務や保育活動の指示は実習先の先生から与えられることが多いことから、それがサポートになる場合とストレスになる場合の両極の性格を持ち合わせているためであることが考えられた。

次に、相関分析の結果を踏まえて、保育実習ストレスが保育者意識に及ぼすネガティブな影響におけるソーシャルサポートの緩衝効果を検討するために重回帰分析を行った。その結果、保育者志向性と保育者効力感のいずれにおいてもいくつかの実習ストレスの影響に対して特定のサポート源からの緩衝効果がみとめられた。特に実習先の先生ときょうだいからのサポートによる緩衝効果が多くみとめられた。実習先の先生からのサポートの結果については、保育者意識の形成において保育実習中に直接指導を受ける実習先の先生との関係が重要な役割を果たすことを示したといえる。また、きょうだいからのサポートの結果については、きょうだいも保育職に就いていることが考えられることや自分と年齢が近いこと職業意識の形成という面において話が合うことが考えられることなどから、特に保育者意識の形成に関して重要なサポート源になっていることが考えられた。一方で、友人・知人からのサポートについては、それを高く受けている者の方が、実習先の保育士から受けるストレスによる保育者効力感の低下を引き起こしやすいという、従来の研究におけるサポートの緩衝効果とは全く逆の結果がみられた。この結果については、ここで想定された友人・知人が他の実習園で実習をしている同級生であったことが原因として考えられる。つまり、友人・知人からのサポートは、問題解決に導いてくれるだけではなく、サポートを提供する側にある友人・知人が保育実習に対してうまく適応しているという社会的比較情報までもたらすことが考えられるのである。例えば、実習先の先生からネガティブな評価を受けている実習生は、実習中という同じ境遇にあるにもかかわらずサポートを提供する側にある友人・知人がそうした悩みを持ち合わせていなかったり、その実習生が実習先の先生からポジティブな評価を受けていたりすることを知るのかもしれない。こうした場合、自分は他の実習生よりも劣っているというネガティブな社会的比較を引き出すことから、ますます保育者としての効力感が低下するのではないのだろうか。従来の研究において、他者からのサポートを受けることは必ずしも肯定的な結果をもたらすばかりではなく、自尊心への脅威や心理的負債感などネガティブな影響をも被援助者にもたらすことがいくつかの研究において明らかにされている(野崎, 2003)が、保育実習場面における友人どうしのサポートのやりとりについても同様の影響がみられる可能性が考えられる。

ま と め

本来、保育実習は保育職を希望する学生に対して、質の高い保育者の育成に結びつくようなポジティブな影響を与えるべきであるが、実習生側の要因、受け入れる実習園側の要因など様々な要因が複雑に絡み合い、必ずしもポジティブな効果ばかりを生むとはいいきれない場合もある。本研究ではこうしたネガティブな効果の1つとして保育実習ストレスを取り上げた。確かに、保育実習というカリキュラムの性質上、それが多少のストレス事態になることはやむを得ないことではあるし、適度なストレスは、実習生に対してポジティブな効果をもたらす場合もあるだろう。しかし、過度の保育実習ストレスが、実習生の保育者効力感や保育職に就こうとする意欲といった保育者意識にネガティブな影響を及ぼし、さらにこの影響が実習後も長い間継続するようであれ

ば、それは保育者養成機関における保育実習というカリキュラムが本来実習生に果たすべき役割から大きく逸脱することになるため、問題視しなければならない。本研究において、保育者養成校教員のサポートの緩衝効果については明らかにされなかったが、実習先の先生、友人・知人からのサポートにおいて緩衝効果がみられたことについては、個々の実習生の適性に応じた実習園の選択や実習園との協力体制の確立及び実習事前・事後指導や授業における友人どうしの実習に関する情報の交換の場の提供といった保育実習へ向けての環境を構築する保育者養成校の役割が大きいことを意味する。今回の研究結果を受け、保育実習において実習生の保育者志向性、保育者効力感を促進させるためには、どのように実習環境を整備していけばよいか、またどのような実習指導を進めていくかといった具体的方策の検討が今後の課題としてあげられよう。

引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy:Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 古屋健・音山若穂・坂田成輝 2005 教育実習生の心理的ストレス・プロセスの縦断的研究 群馬大学教育学部紀要 人文・社会学編, 54, 203-220.
- 久田満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46(2), 203-211.
- 水野理恵 2001 幼児教育専攻学生の保育者効力感—その発達過程と保育実習評価との関連— 愛知江南短期大学紀要, 30, 97-110.
- 西坂小百合 2002 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響 教育心理学研究, 50(3), 283-290.
- 野崎秀正 2003 生徒の達成目標志向性とコンピテンスの認知が学業的援助要請に及ぼす影響—抑制態度を媒介としたプロセスの検証— 教育心理学研究, 51(2), 141-153.
- 野崎秀正・森野美央 2006 保育専攻学生における保育者意識と実習ストレスの関連 宮崎女子短期大学紀要, 33, 117-127.
- 音山若穂 2002 児童福祉施設実習の実習ストレスと緩衝要因およびストレス・プロセスと自己評価の関連 保育士養成研究, 20, 9-23.
- 音山若穂 1995 心理的ストレス反応に対するソーシャル・サポートの緩衝効果—教育実習生のストレスに関する一研究— 早稲田大学大学院文学研究科紀要第一分冊, 29-41.
- 坂田成輝・音山若穂・古屋健 1999 教育実習生のストレスに関する一研究—教育実習ストレスサー尺度の開発— 教育心理学研究, 47(3), 335-345.
- 嶋信宏 1996 ソーシャルサポート 児童心理学の進歩 金子書房
- 浦光博 1992 「支えあう人と人」— ソーシャル・サポートの社会心理学— サイエンス社